

Chapter

3

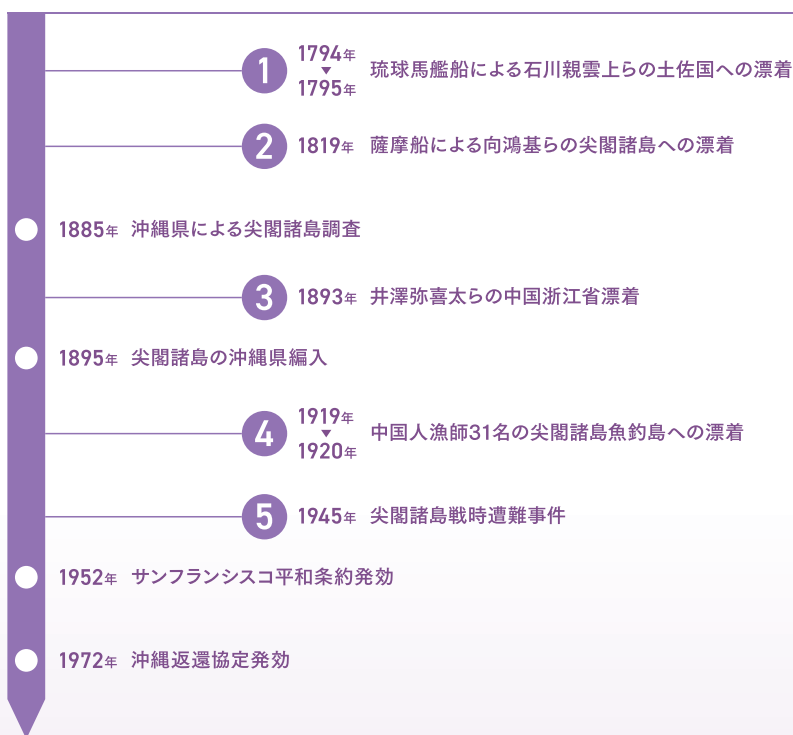
尖閣諸島

19世紀後半まで、尖閣諸島は、どの国にも属さない琉球周辺の無人島でした。その一方で、同諸島は琉球の人々が毎年のように琉球と福州の間を往来する航路の途中にあり、航路標識として活用され、琉球ではよく知られた島々でした。

沖縄県設置後、1889年ごろから、尖閣諸島への漁業者の進出が活発になり、これに対して行政上の管理を及ぼすため、沖縄県は三度、同諸島の沖縄県編入を上申し、1895年に沖縄県編入の閣議決定が行われます。

中国政府は、1895年の尖閣諸島の日本領への編入から、東シナ海に石油埋蔵の可能性が指摘され、尖閣諸島に注目が集まった1970年代に至るまで、実に70年以上もの間、国際的に確立された日本による尖閣諸島の領有に、一切の異議を唱えませんでした。実際、漂流事件に関連して、当時の中華民国も、尖閣諸島を沖縄県の一部として日本の領土と認識していたことがわかります。

以上について漂流事件を通じて見てみましょう。



前近代から「イヨコンクバジマ」の名で 琉球の人々に知られていた尖閣諸島

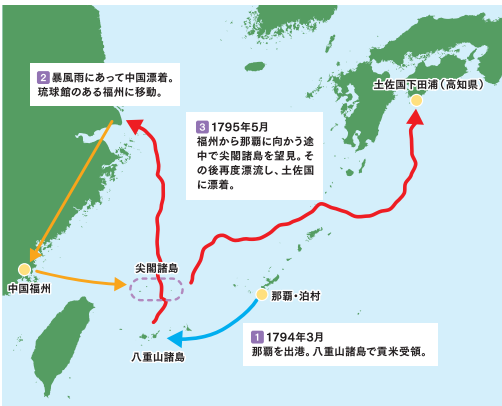
1794年 — 1795年

1 琉球馬艦船による石川親雲上らの土佐国への漂着

1819年

2 薩摩船による向鴻基らの尖閣諸島への漂着

尖閣諸島は、前近代、琉球の人々が頻繁に行き来した琉球・福州間の航路の途中にあり、航路目標として活用されました。当時の漂着の記録を見ると、琉球の人々が尖閣諸島を「イヨコンコハシマ(クバジマ)」と呼び、具体的な知識を有していたことがわかります。



琉球馬艦船による石川親雲上らの土佐国への漂着※1

- 寛政6(1794)年3月、泊村(現：那覇)を馬艦船※2で出帆し、八重山島に貢米を受け取りに行く。石川親雲下※3は八重山島で合流。一行は、その帰り暴風に遭遇。
- 中国江南省に漂着し、福州を経由し那覇に戻る際、寛政7(1795)年5月、尖閣諸島の久場島と大正島を望見。
- 一行は、那覇を目指す航海の途中、また遭難して土佐国下田浦(現：高知県四万十市。四万十川河口付近)に漂着。

※1 「下田日記」『土佐国群書類従』第82巻「寅年八重山島へ帰国之初り江南揚州府之内東台县漂着之時日記」より

※2 馬艦船：琉球で用いられたジャンク船

※3 親雲下：琉球士族のうち中級士族が名乗った称号



薩摩船による向鴻基らの尖閣諸島への漂着※4

- 1819年頃、向鴻基が薩摩に出張したところ、一行の薩摩船が嵐に遭遇し、「魚根久場島」と呼ばれる島に漂着。
- 島に停泊し、用水を汲もうとしたが、湧水は無かった旨の記載あり(漂着したのは魚釣島の南海岸側と推測され、また島に上陸したことがうかがわれる)。
- 一行は、漂着後、三日間風を待ったが、突然暴風が起こり再度漂流し与那国島に漂着。与那国島の役人は遭難船の救助に慣れており、船を入り江に誘導した。

※4 「向姓具志川家家譜 十二世譜鴻基」より「那覇市史資料編纂第1巻7」に収録。所蔵：沖縄県立図書館

ポイント 琉球の人々は尖閣諸島について 具体的な知識を有する。

尖閣諸島は、前近代、「魚根久場島(イヨコンクバジマ)」と呼ばれ、航路目標として琉球の人々に活用されました。同諸島は、琉球の人々が、多いときには毎年一度の頻度で行き来した琉球・福州間の航路の途中に位置し、琉球の人々は同諸島について具体的な知識を有していました。例えば、右に示す「渡閩航海図」は、那覇と福州の間の航路が描かれた巻物ですが、尖閣諸島の魚釣島と久場島の間に実際と同じ5つの島が描かれています。

コラム

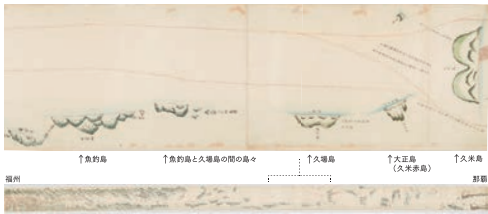
クリック

向鴻基・運天按司朝英
(具志川御殿12世)



「琉球船の図」

1798年に銚子に漂着した大型(12反帆)馬艦(マールン)船で、琉球王国から薩摩藩への物資の輸送を任務としていたとされます。



「渡閩航海図」

所蔵：沖縄県立博物館・美術館

漁業者管理の必要性の高まり

1893年

いざわ や き た

3 井澤弥喜太らの中国浙江省漂着

1880年代の末から、アホウドリ羽毛や夜光貝の貝殻などを求めて尖閣諸島には数多くの漁業者が進出します。ここで紹介するような漂流事件なども生じたことから、沖縄県は行政的管理の必要を感じ、同諸島の沖縄県への編入を上申、1895年の同県編入の閣議決定に至ります。



漂流の経路

- 1 1893年6月4日、井澤弥喜太、有川岩助、満石良助の3人が尖閣諸島魚釣島に向け石垣島を出港したが暴風に遭う。台湾らしき島影を見てそちらに向かおうとしたが風によりかなわずそのまま流される。
- 2 6月9日、中国浙江省温州沖に漂着。福建(福州)を目指し南下。6月11日温州府平陽郡江口で役所に届けを出す。同国地方官の厚遇を受け1か月程同地に滞在。
- 3 福建省霞浦県三洲村(現:寧徳市)に上陸。役所の厚意により船の修復を受け、9日間滞在。護衛船が付きつつ出港。福建(福州)に到着。夜の間に船の財物をすべて盗まれる。
- 4 現地の日本人、霞浦県知事及び在上海日本領事館の支援を受け、上海經由(9月1日着9日同発)で長崎に帰着。

ポイント

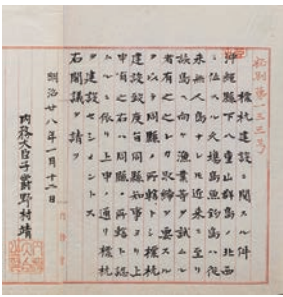
尖閣諸島の行政上の管理の必要性の高まり。

尖閣諸島の周辺の手は荒れることも多く、1893年12月にも沖縄県知事名で尖閣諸島(「阿根久場島」)に出漁した遭難者3名を発見した場合は最寄りの役所に届け出るべき旨の告示が出ています(「阿根久場島渡航漁業者行方不明の件」)。

このように尖閣諸島の行政上の管理の必要性が高まっていたこともあり、沖縄県は、3回も同諸島の沖縄県編入を政府に上申しました。そして、同諸島は、ついに1895年1月14日、閣議決定により沖縄県に編入されました。1月12日の閣議請議(秘別第一三三三)も、「近来ニ至リ該島ヘ向ケ漁業等ヲ試ムル者有之(、)之レカ取締リヲ要スルヲ以テ同県ノ所轄トシ」と、編入の必要性を説明しています。



1893(明治26)年12月
沖縄県告示第四十四号
「阿根久場島渡航漁業者
行方不明の件」
所蔵:石垣市立図書館



1895(明治28)年1月12日
秘別第一三三三
「標杭建設二関スル件」
所蔵:国立公文書館

コラム

クリック

波乱万丈な井澤弥喜太らの漂流

クリック

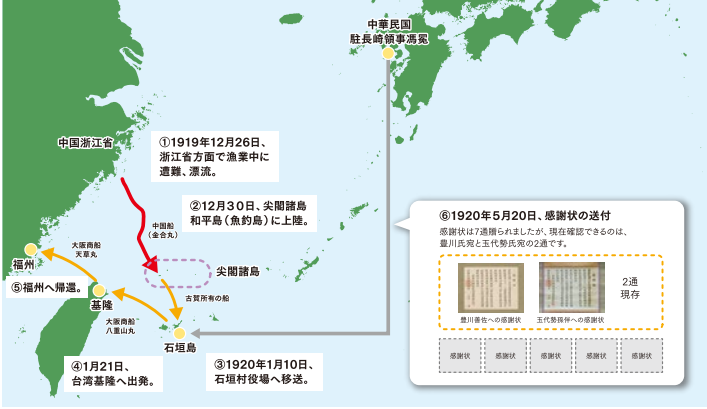
知られざる尖閣諸島進出の
先駆者:松村仁之助

中華民国は尖閣諸島が沖縄県に属し、 日本の領土の一部であると認識

1919年 — 1920年

4 中国人漁師31名の 尖閣諸島魚釣島への漂着

1895年の編入後、沖縄県は尖閣諸島開拓を出願していた古賀辰四郎に同諸島を無償貸与します。古賀はアホウドリ羽毛の採取やカツオ節工場を設置するなどして同諸島で事業を展開し、1919年末に尖閣諸島魚釣島に中国人漁師31名が漂着した際には、同島のカツオ節工場の関係者が彼らを救助・保護しました。翌年、中華民国の長崎領事が贈った感謝状には、「日本帝国沖縄県八重山郡尖閣列島」と記載されており、中華民国も、尖閣諸島を日本の領土と認識していたことが確認できます。



概要

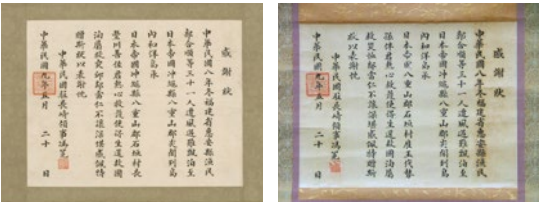
1919（大正8）年12月30日、尖閣諸島の魚釣島に漂着した郭合順ら中国福建省の漁業者31名を、尖閣諸島で事業を展開していた古賀商店の人々が救助。翌年1月10日に石垣市に移送。

遭難者の送還について、石垣村役場と中華民国駐長崎領事との間での調整の結果、郭ら31名は1月21日に大阪商船八重山丸で台湾基隆へ出発し、25日に基隆から廈門行き的大阪商船天草丸で福州に帰着。

ポイント 中華民国は尖閣諸島が沖縄県に属し、日本の領土の一部であると認識。

1920 年（大正9年）、中華民国駐長崎領事は、中国の漁民を救助した島民や、その他の沖縄の日本側関係者に対して漂着地である尖閣諸島の魚釣島が沖縄の一部であることを明記した感謝状を贈っています。当時の記録文書によれば7通の感謝状が贈られたようですが、現存が確認されているのは2通です。感謝状には、「日本帝国沖縄県八重山郡尖閣列島」と記載されています。

感謝状から確認できるのは、当時の中華民国も、尖閣諸島を日本の領土と認識していたということです。



尖閣列島遭難救護の感謝状 豊川善佐氏宛（左）玉代勢孫伴氏宛（右）
 所蔵：石垣市立八重山博物館

コラム

クリック 感謝状送付の経緯について

第二次大戦中に尖閣諸島で起こった悲劇

1945年

5 尖閣諸島戦時遭難事件①

尖閣諸島戦時遭難事件は太平洋戦争末期（1945年7月）、日本の小型船2隻が、石垣島から台湾へ民間人を疎開させる途中にアメリカ軍機の攻撃を受け、1隻が沈没、1隻が大破し、当時無人島だった尖閣諸島魚釣島に漂着した事件です。約50日後に救出されましたが、戦闘と飢餓などにより少なくとも50人以上（100名以上との回想もあります）が死亡しました。その悲惨さから尖閣諸島で起きた最も著名な遭難事件となっています。

1 発端

集団疎開の経緯

1944（昭和19）年6月のアメリカ軍サイパン上陸を契機に、大本営は沖縄県民の島外疎開の検討を開始します。同年7月7日の緊急閣議で、女性・子供・高齢者を対象に日本本土へ8万人、台湾へ2万人を疎開させる計画が決定されました。一般住民の島外疎開はあくまで勸奨の形式であり、県や警察による強い行政指導はありましたが、法的強制力はありませんでした。

疎開途中の襲撃と魚釣島への漂着

1945（昭和20）年6月24日、石垣島の住民に対し、24回目となる台湾疎開希望者の募集がなされます。6月30日の午後8時半に石垣港で乗船が始まり、一心丸と友福丸の小型船2隻に約180人（約240人という回想もあり）が乗り込み、乗船者のほとんどは老人、女性と子供で、朝鮮や台湾の出身者もいました。

西表島を経由し、両船がもう少しで台湾の基隆に入港予定という7月3日午後2時頃、定期哨戒中のB24と思われるアメリカ軍機によって発見されてしまい、爆弾投下を受け一心丸が沈没。さらに機銃掃射を受けて友福丸も死傷者が続出し、エンジンが破損して航行不能になりました。友福丸から伝馬船が降ろされて一心丸の乗船者の救助作業が行われましたが、泳げない者も多かったため相当数が溺死しました。

友福丸は浸水しながらもかろうじて沈没をのがれ、ありあわせの布を集めて帆を張り、エンジンも再始動しました。乗船者の中に尖閣諸島で古賀商店の鰹節製造事業に携わった経験者がいたため、尖閣諸島へと向かうこととなり、4日午前9時半頃に魚釣島に到着しました。



古賀辰四郎が構築した鰹節工場の暴風垣（魚釣島、1979年）
写真提供：新納義馬氏



魚釣島
写真提供：尖閣諸島資料文献編集会



与那国沖航行中の船舶に対する攻撃（1945年7月3日）
所蔵：米国国立公文書館（NARA）



与那国沖航行中の船舶に対する攻撃（1945年7月7日）
所蔵：米国国立公文書館（NARA）



第二次大戦中に尖閣諸島で起こった悲劇

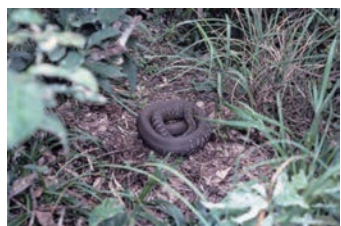
1945年

5 尖閣諸島戦時遭難事件②

2 漂着から救助まで



ビロウヤシ（魚釣島、1952年）
島に豊富にありましたが、食用になるのは幼木の芯であり、それらは食べ尽くされ、高い木だけが残り、女性、子供や老人では採ることはできませんでした。
写真提供：多和田真淳氏



シュウダ（魚釣島、1979年）
シュウダ（臭蛇）は、皮の部分に臭いがありますが、皮を剥ぎ取れば食べることができるという証言があります。1979年の沖縄開発庁調査の時には島内に多くいたようですが、1945年当時は多くいたという証言はありません。
写真提供：新納義馬氏

魚釣島に自生する食用になる植物の例



ハマダイコン（魚釣島、1979年）
写真提供：新納義馬氏



ホソバワダン（ニガナ）
写真提供：新納義馬氏

尖閣諸島での生活：餓死者の続出

上陸当初は米や鯉節など乏しい食糧を出し合って野草入りの雑炊にする協同炊事が行われましたが、10日～2週間ほどで打ち切りとなり、以後は各自で食糧を集めました。魚釣島には淡水が湧くため飲料水には困りませんでした。石垣島民に別名で「クバ島」と呼ばれるほどビロウヤシ（クバ）が豊富であったものの、数多くの遭難者がいたため幼木は食べ尽くされ、高い木だけが残り、女性、子供や老人では採ることはできませんでした。体力のある一部の者は魚や野鳥を採りましたが、そうでない者は野草（ホソバワダン、スベリヒユ、ハルノゲシ、アダンの芽やユリの根など）や、磯辺で獲った小魚やヤドカリなどで命をつなぎました。体力の低下が激しく、多数の餓死者が出て、毒草を食べて苦しむ者もありました。米軍機が島に飛来することもありましたが、幸いに死傷者は出ませんでした。

救助の経緯：小舟を建造しての脱出

一旦は友福丸を修理し、助けを呼ぶために出港しますが、途中でエンジンが止まり、乗員は船を捨てて島に戻ってきます。遭難者の間に落胆が広がりましたが、島の反対側にあった難破船を資材として建造を進めることになりました。幸い船大工がいたため、サバニと呼ばれる小舟が15日ほどで完成しました。陸軍兵と船員経験者ら9人の決死隊（陸軍兵と船員経験者、主計准尉）が編成され、8月12日午後5時頃に石垣島を目指して出発し8月14日午後7時頃に石垣島の川平湾へと到着、駐屯の日本軍部隊を経由して旅団司令部に連絡がされました。

8月15日、事態を知った旅団の要請を受け、台湾所在の日本軍機が魚釣島に飛行、乾パンと金平糖をパラシュート投下しました。石垣島からも旅団の指揮する2～3隻の救助船が軍医を乗せて出発し、終戦の日の後である8月18日に到着しました。救助船は魚釣島所在の生存者を収容し、19日午後石垣島へと帰還しました。また老人や子供たちの中には、栄養失調で衰弱が進んでいたため、救助された後に亡くなった方もいたようです。



サバニ船（写真はハーリー祭のもの）
脱出船はサバニ船だったといわれますが、難破船から船を作った船大工は本土出身で、同じく遭難した沖縄本島の糸満出身の漁師の助言を受けながら製造したため、和船とサバニの中間的な船だったのではないかと推測されています。

鳥島・小笠原諸島

東京から約580km南に位置する伊豆諸島の鳥島、約1,000km南に位置する父島・母島をはじめとする小笠原諸島。

江戸時代初期には伊豆諸島の青ヶ島までの島々には日本人の定住者がいたと考えられますが、これより南の島々である鳥島や小笠原諸島の島々については、江戸時代に漂着しその後本土に戻ることができた日本人によってその存在が明らかとなり、その後の幕府や明治政府による調査や開拓、ひいては日本の領有につながりました。

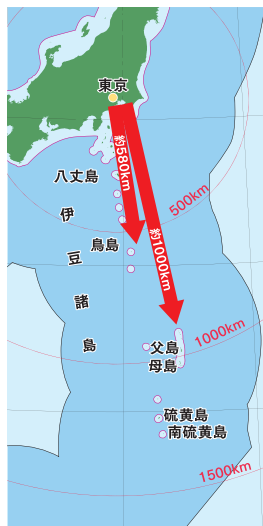


わが国の経済水域の約3割を占める小笠原諸島

日本最東端の島である南鳥島、日本最南端の島である沖ノ鳥島を含む小笠原諸島は、わが国経済水域の約3割を占めています。

小笠原諸島の名前の由来

16世紀末に小笠原貞頼が発見したとされることが名前の由来と推測されますが、その根拠とされる『異無人島記』の記述は信憑性が疑われています。



- 1639年 オランダ船が父島・母島と思われる島を発見。
- 3 1670年 紀州船の小笠原島*漂着
- 1675年 漂流者の報告を元に、江戸幕府は嶋谷市左衛門を小笠原島に派遣し、調査を行う。
- 18世紀 嶋谷による小笠原島の調査は、ケンペルやシーボルトにより欧米に紹介される。これらの著作やペリーの『日本遠征記』により日本語の「無人島」という呼び名を元にしたBonin Islandsという名称が定着する。
- 1 1785年 (野村)長平らの鳥島漂流
- 1797年
- 1827年 英国軍艦が小笠原島を英領すると宣言し、その旨を記載した銅板を島内に設置。しかし、英国政府は正式に承認せず。
- 1830年 欧米人5名などが父島に入植。以後、欧米系の島民が継続的に居住。
- 2 1841年 (中濱)万次郎らの鳥島漂着
- 1853年 ペリーが小笠原島に来航。住民から貯炭地を購入。その後香港に寄港した際に英国が行った照会に対し、同購入は私法上の行為であることを回答。さらに、1675年の日本の調査に言及し、1827年の英国の調査より先行していることを指摘。
- 1861年 幕府・外国奉行水野忠徳らによる小笠原島の再調査。島民に日本領土であること、島民を保護することを呼びかけ同意を得る。1862年6月、駐日の各国代表に小笠原諸島の開拓再開を通告。日本人移民も派遣するが生麦事件の影響などを考慮し、翌1863年一旦退去。
- 1862年
- 1876年 小笠原島の日本による統治を各国に通知。
- 1887年 玉置半右衛門「鳥島拝借並二定期船御寄島願」提出。アホウドリ捕獲事業開始。
- 1897年 鳥島の小笠原島附属の閣議決定。1901年に八丈島の附属に改められる。

※「小笠原島」は、現在の小笠原諸島ではなく、父島列島及び母島列島を中心により狭い範囲を指します。

日本の「ロビンソン・クルーソー」:不屈の精神で鳥島で 十年以上生き自力で脱出

1785年 — 1797年

①（野村）長平らの鳥島漂流

吉村昭の小説『漂流』でも紹介されたとおり、江戸時代の漂流エピソードの中でももっとも人々に強い印象を与えるものの一つです。

漂流の経路

- 1 土佐の岸本（現：高知県香南市）の農家に生まれた船乗り長平は、天明5（1785）年の正月、廻船問屋を営む主人の命により、仲間3人と藩の御蔵米を赤岡浦から田野浦と奈半利浦へ運んだ帰り、冬の大西風（シラ）に遭う。
- 2 12日後、はるか南東の無人島（鳥島）に漂着する。無人島には、手で捕まえることのできるたくさんのアホウドリがいて食糧とすることができたが、火をおこす道具を失っていたため生で食した。鳥島に池や沢はないため、水は、アホウドリの卵の殻を使って貯めた。アホウドリは渡り鳥であり、飛び去った後の期間のために干し肉にした他、海藻や貝、そして時には魚といった他の食糧を探さなければならなかった。漂流後2年以内に仲間3人は相次いで死亡し、しばらく長平一人であった。

- 3 漂着時24歳だった長平は、仲間全員の死にも負けず、たくましく生き延びた。三日月、満月などによって月日を数え続け、天明8（1788年）に大坂船（11名）が流れ着いた際には正確な日付を答えたという。

- 4 寛政2（1790）年、薩州船（6名）も漂着。薩州船には、鍛冶や船大工の経験者があり、流れ着いた錨の鉄などを用いて釘を作成、流木を使って船を組み立て、寛政9（1797）年に島を脱出、青ヶ島経由で八丈島着（14名が生き残っていた）、奇跡の生還を果たした。漂流から13年の時が経過していた。



野村長平墓
写真提供：香南市教育委員会

コラム

クリック 実は異なる鳥島と尖閣諸島のアホウドリ

クリック 明治期の鳥島及び尖閣諸島開発
(アホウドリの捕獲と戦後の保護活動)

米捕鯨船に救助され、幕末の対米交渉などで活躍

1841年

2 (中濱) 万次郎らの鳥島漂着

13年間結局、救助可能な船が現れなかった長平のケースと異なり、万次郎には米捕鯨船が現れました。この頃の米捕鯨船の西太平洋への進出を象徴しています。



(ジョン万次郎資料館ウェブサイト「航路図」などを参照し作成。)

漂流の経路

- 1 土佐中浜の貧しい漁師の家に生まれた万次郎は、天保12(1841)年の正月14歳のとき、仲間の漁師4人と宇佐から延縄漁に出たところ遭難。
- 2 数日の漂流後、鳥島へ漂着。143日の無人島生活ののち、偶然通りかかったアメリカの捕鯨船ジョン・ハウランド号により5人全員が救助された。
- 3 ホイットフィールド船長はまず5人を安全なハワイに連れて行った。
- 4 その上で、万次郎については本人の希望を確認した上で、アメリカに連れて行くことにした。万次郎は船長の故郷フェアヘブンで船長の養子となり、学校で英語・数学・測量・航海術・造船技術などを学んだ。学校卒業後、捕鯨船に乗って太平洋、大西洋、インド洋など世界中を航海。
- 5 25歳で土佐に帰国した万次郎は、翌年幕府により江戸に招聘され、幕府通弁のかたわら造船、航海、測量、捕鯨の指導にあたった。万延元(1860)年日米修好通商条約批准書交換のための海外使節団派遣の際には、咸臨丸に通訳、技術指導員として乗船。文久元(1861)年には小笠原諸島(父島・母島)の調査に同行した。



「無人島東西之図」
アホウドリは、土佐で「トクロー」と呼ばれていました。鳥島の営巣地には二千羽以上とも見えるおびただしい数がいて、巣窟のなかにはひなの姿もありました。
『漂異紀要』巻之一より
所蔵：早稲田大学図書館



左から万次郎、五右衛門、筆之丞(伝蔵は米での通称)
遭難者5名のうち、ハワイで亡くなった重助、ハワイに残ることを決めた寅右衛門を除いた3人が帰国しました。帰国した3人は、もともと漁民の言葉しか話さない上に、長い海外生活で言葉を忘れていました。土佐藩の聴聞において、藩の絵師であった河田小龍が、聴聞を手伝いました。小龍は万次郎と起居を共にしながらお互いに言葉を覚え、興味深い海外事情を聞き出し、イラストとともに記録しました。
『漂異紀要』巻之一より
所蔵：早稲田大学図書館



万次郎少年像
提供：土佐清水市

小笠原諸島の領有につながった漂流

1670年

3 紀州船の小笠原島漂着

漂流者の報告を元に、幕府が1675年に小笠原島の調査を行い、この調査が他国に対して先行したことが、その後の小笠原島の領有につながりました。



漂流の経路

寛文10(1670)年、7名が乗りこむ阿州浅川浦(現：徳島県海部郡)の船は、紀州有田(現：和歌山県有田市)でみかんを積みこみ江戸に向かう途中、遠州灘で猛烈な北西の風に遭遇して遭難、現在の小笠原諸島母島に漂着しました。船頭の勘左衛門は上陸直後に亡くなってしまいましたが、残った6人は座礁した元の船の船板で船を造り、遭難からおおよそ5か月後に豆洲洲崎港(現：静岡県下田市)に生還を果たしました。

コラム

クリック

みかんの輸送について

延宝3(1675)年 江戸幕府 小笠原島探検調査

紀州船の乗組員は下田奉行所にて、八丈島はるか南方に「樹木が生い茂り、多くの魚介類・鳥類が群れ棲む」無人島があることを報告します。これを契機として、幕府は無人島の探検調査に乗り出します。

延宝3(1675)年、幕府は長崎で唐船富国寿丸を建造し、御朱印船時代の生き残りの船乗りで、天文航法に精通した長崎の老船頭嶋谷市左衛門を派遣し、調査と地図の作成を行いました。

この調査は、ケンペルやシーボルトにより海外に紹介されました。この調査が、その後、小笠原島が日本の領土と認められる上で重要な根拠の一つとなりました。

1853年、ペリーが小笠原島に寄港したことについて英国が行った照会に対し、ペリーは、この1675年の日本の調査に言及し、1827年の英国の調査より先行していることを指摘しています。



寛文10(1670)年、長崎で建造した唐船の原型の中国式ジャンク。年貢米輸送の効率化を図って幕府自身が試作した船で航洋性が高く、小笠原島の探検に用いられました。当時、幕府には搬送制限の意識は全くなかったという説もあります。
所蔵：松浦史料博物館



探検船は小笠原諸島父島の二見湾に着船後、34日間にわたって兄島、弟島、母島にも上陸して動植物、鉱物や地形などを調査し、地図を作成しました。地図には、父島に到着した日付と、探検した者の名前が書かれています。
所蔵：長崎歴史文化博物館

威臨丸の知られざるもう一つの航海

1861年 — 1862年

江戸幕府 小笠原島の再調査と開拓

1861年、幕府・外国奉行水野忠徳らによる小笠原島の再調査が行われました。島民に日本領土であること、島民を保護することを呼びかけ同意を得ました。これを踏まえ、幕府は駐日の各国代表に小笠原島の開拓再開を通告します。

19世紀に入るとイギリスの測量艦の訪問(1827年)、アメリカ人セボレーの移住(1830年)など、英米の小笠原島への接近がみられるようになりました。1853(嘉永6)年、ペリーが訪日の際に小笠原島に寄港して貯炭場を設け、英国公使オールコックからも幕府にこの島が日本の所有に属するものと照会があると、幕府はいよいよ再度の調査を企画します。

1861(文久元)年12月、幕府は隊長を外国奉行水野忠徳、艦長を小野友五郎として、アメリカから戻った威臨丸を小笠原島に派遣しました。水野たっての希望もあり、島島への漂着とアメリカでの生活経験をもつ中濱万次郎が通訳として同行しました。

島民に日本領土であること、島民を保護することを呼びかけ同意を得ることに成功しました。これを踏まえ文久2年5月(1862年6月)、駐日の各国代表に小笠原諸島の開拓再開を通告します。



「12月19日初見小笠原島図」
宮本元道「小笠原島真景図」より
欧米諸国の開国要求に脅威を感じた江戸幕府は、ペリー来航後、オランダに軍艦を発注しました。威臨丸はそのうちの一隻で、洋式スクリューを有する日本初の軍艦でした。安政7(1860)年、ワシントンでの日米修好通商条約批准書交換を終えて帰還した翌年、小笠原島への調査に向かいました。
所蔵：国立国会図書館



左から「父島扇ヶ浦図」「母島沖村於て夷女舞躍之図」「母島南手之山上喫午飯図」
宮本元道「小笠原島真景図」より。小笠原島への航海と島の調査に、漢方医と蘭方医それぞれ1名の派遣が要請されました。漢方医としては本草学者の小野苓庵が、蘭方医としては、本務は絵図記録係だが蘭医術の心得もあった宮本元道がそれぞれ選ばれ、医療に従事しながら島の産物調査を行いました。真景が得意と評された宮本が記録した絵図には、現地の住民との交流や、調査の合間の食事の様子なども描かれています。
所蔵：国立国会図書館



水野忠徳
所蔵：大儀寺



中濱万次郎
提供：万次郎直系5代目 中濱京氏



小野友五郎
提供：笠間稲荷神社

1876(明治9)年 明治政府 小笠原島の統治を各国に通知

文久2(1862)年には八丈島から開拓民が派遣されますが、文久3(1863)年、生麦事件の勃発によりイギリスとの関係悪化を懸念した幕府によって中止が決定され、開拓移住者も総引き揚げとなりました。その後再開発を決定した明治政府による1875(明治8)年の明治丸派遣を経て、1876(明治9)年、明治政府は小笠原島を内務省の主管と決定し、各国に日本による統治を通知、国際的に日本の領土と認められました。



クリック「漂流者冥福の碑」について